

第22部

コミュニティ活動支援のためのシステム構築

奥村 貴史、阪本 裕介

第1章 はじめに

現在のように日本にインターネットが普及していなかった1990年代前半、WIDEでは後に日本社会を変えていくような多くの試みがなされていた。しかし、昨今においては、合宿や研究会への参加者も減少しており、新しい参加者も主要研究室からの参加が主体で、多くは卒業、修了と共にWIDEのコミュニティを去ることが珍しくない。

このような事態は、WIDEの研究コンソーシアムとしての活力を失わせる。そこで、CSAW WGは、WIDEコミュニティにおけるコミュニケーションを活性化し、研究活動の触媒となることを意図して、名古屋大学河口研究室を主体として開発されたアカデミック用SNSであるACS (Academic Community System)をカスタマイズし、Collaboration Support Architecture for Wide-Community (CSAW)システムの運用を2007年より開始した。

CSAWを活用することにより、WIDEメンバーは、同じテーマに関心のある他のメンバーをCSAW上の「コミュニティ(フォーラム)」を通じて簡単に見つけることが出来る。また、WGやBoFのチェアは、手間を掛けずに様々な規模の研究グループを運営することが可能となる。また、WIDEの新人メンバーに対して気軽に簡便なコミュニケーション手段を提供する目的にも供することが出来る。

本稿では、こうしたCSAWの現状と課題について整理し、今後の方向性について記す。

第2章 CSAWの運用状況

CSAWは2011年9月6日よりWIDEクラウド上で動作しており、WIDE研究会におけるスケジュール調整などに引き続き利用されている。しかしながら、今年度の利用状況は図2.1、図2.2と低迷しており、アクティブユーザ数の低下が確認できる。

利用率が低下する一方で、WIDEメンバのコミュニケーション情報のハブとしての動作には引き続き需要があるため。WIDE合宿での話者紹介システム向けにCSAW内部の情報を取得するためのAPI実装を行った。(図2.3 API)

これはXML-RPCを用いたAPIであり、当該APIを利用することでCSAWからユーザ名や所属組織などを取得できるようになっている。

第3章 今後の展望について

研究コンソーシアムにとって、内部での自由闊達な議論は活発な研究活動を維持していく上での生命線である。そこで、CSAW WGでは、WIDEコミュニティにおけるコミュニケーションを活性化し研究活動の触媒となることを目指し、システムを開発、運用して来た。しかしながら、活発な利用は一部のユーザーに留まっている。また、マイツイト機能は、twitterユーザーのフォローが増えることでより意義が高まるが、メールでのフォロー依頼だけではcsaw_developアカウントのフォロワー数は変化がなかった。今後、Member WIKIや、member.wide.ad.jp、bd.wide.ad.jpとの統合の他、システムの終了も含めた根本的な対策が求められている。

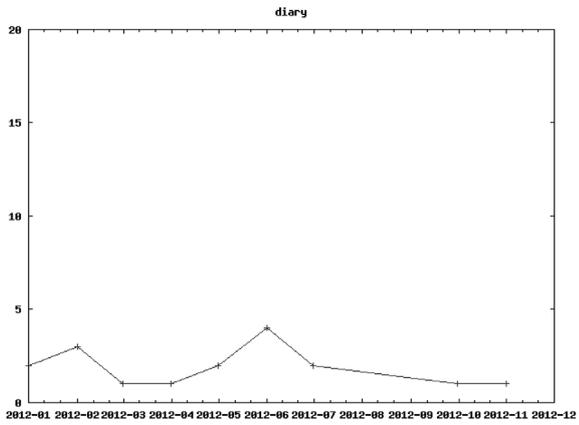


図2.1 diary

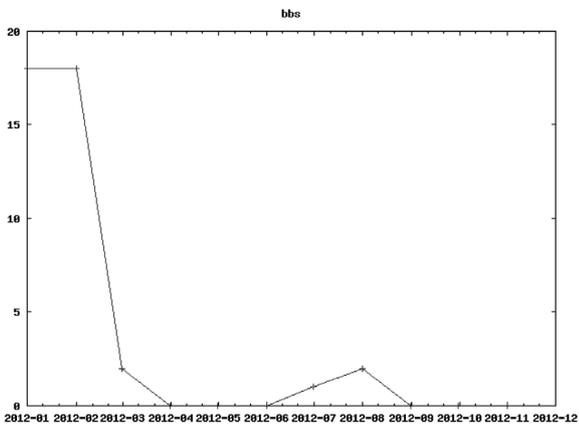


図2.2 bbs

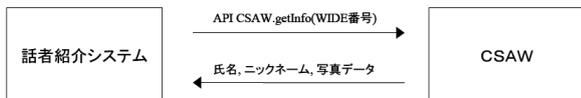


図2.3 API